

鶴屋南北全集

第五卷

鶴屋南北全集

第五卷

編集委員

郡司正勝

廣末保

浦山政雄

大久保忠国

藤尾真一

竹柴惣太郎

鶴屋南北全集 第五卷

(全十二卷)

一九七一年五月三十一日 第一版第一刷発行

定 価 四、五〇〇円

編 者 藤尾真一 © 一九七一年

発行者 田川敬吾
発行所 株式会社三一書房

東京都千代田区神田駿河台二の九
電話〇三(二九)三一三一番
振替東京八四一六〇番
郵便番号 一〇一

印刷所 株式会社三陽社
製本所 株式会社鈴木製本所

凡例

表記は、底本のままを原則としたが、読みやすくするために、次の諸点に手を加えた。

- 1、台帳では、セリフの冒頭や、ト書きの文中の人物を、俳優名で示すが、これらはすべて役名に改めた。
 - 2、役人替名は各幕ごとに付し、登場順に並べた。
 - 3、各役のセリフごとに行を改め、セリフの頭付け「一」は省略した。
 - 4、漢字の字体は現行の新字体を用いたが、正字・異体字などはなるべく底本の字体の再現にとめた。但し、あまりにも特殊な用字や草書体は次のごとく処理した。
- | | | | | |
|--------|-------|------------|-----------|------|
| 遼↓遼 | 吳↓異 | 臺↓台 | 救↓数 | 崑↓嶋 |
| 峯↓崎 | 松↓船 | 奈↓松 | 綱↓綱 | 勒↓勤 |
| 宜↓宜 | 結↓結 | 鞆↓鼓 | 抑↓叩 | 釵↓劍 |
| 取↓最 | 尻↓尻 | 襷↓装 | 勞↓勢 | 棄↓奪 |
| 木↓等 | 緩↓抜 | 迄↓迄 | 廣↓魔・摩 | |
| 欄↓欄 | 柳↓柳 | ヒ・ム↓候 | | |
| 多↓参らせ候 | ム↓也 | ヒ↓被 | ムリ升↓ござります | |
| ム↓より | 斗↓ばかり | ベ↓しめ | と↓こと | き↓さま |
| ム↓かしく | 成↓なる | 是↓これ | 被成↓なさる | 此↓ |
| この | 其↓その | 爰↓こゝ | 能↓よく | 斯↓かく |
| 夫↓それ | タア↓タベ | 式ア・服↓式部・服部 | | |
- 5、仮名づかいは、すべて底本のままとしたが、平仮名の字体は現行のものに改めた。また、助詞などに用いられた片仮名のハ・ミ・ニなどは、平仮名に改めた。
 - 6、本文中ルビの原則は次の通りである。

イ、底本の仮名を漢字に改めた場合、底本の仮名は当てた漢字のルビとして残した。

ロ、読みにくい漢字には、*印を用いてルビを付したが、この場合は現代仮名づかいを用いた。

ハ、底本に付されているルビには（ ）を用いて原形を示した。

注 隅田川花御所染・辰橋背御撰・杜若艶色紫は、底本が総ルビ、もしくはそれに近いので、適宜削除した。また、底本のルビの原形を示す（ ）は用いずそのままとし、平仮名に漢字を当てた場合は、当てた漢字のルビとして残し、（ ）で括った。

7、句読点ならびに濁濁は、校訂者の見解によってこれを施し、また改め正した。

8、思い入れを表わす記号「○」や、反復記号は、底本のままとしたか、「こ」は、漢字・平仮名・片仮名の場合に応じ、それぞれ「タ」「ム」「レ」に改めた。

9、当字は底本のままとしたが、明らかに誤字は正し、脱字は（ ）を付して補い、衍字は削除した。

10、校訂者が意識的に補なった場合、（意味不明・参考補足等）は「」を用いた。

11、原本のままの場合はママと片仮名でルビを付した。

12、草紙紙は平仮名で表記されたものがほとんどなので、適宜漢字をあてた。

13、虫喰い・不明は、それぞれ□とし、ムシ・フメイとした。

14、校訂 お染久松色讀販（藤尾真一） 辰橋背御撰（松井敏明）

杜若艶色紫（梅崎史子） 隅田川花御所染（服部幸雄） 怪談岩倉万之丞・怪談鳴見紋（小池章太郎）

鶴屋南北全集 第五卷 目次

お染久松色讀販	7
戻橋背御撰	57
隅田川花御所染	167
杜若艷色紫	279
梅柳若葉加賀染	327
怪談岩倉万之丞	419
怪談鳴見絞	447
解説	479

鶴屋南北全集

第五卷

お染久松色讀販

そめ ひさまつうきなのよみうり

序幕

〔龜井戸巴屋の場〕
柳島百度參の場
小梅煙草屋の場

役人替名

一	茶屋女おくら	岩井	滝次郎
一	齒磨き奴太刀八郎左衛門	市川	升三郎
一	油屋娘お染	岩井	半四郎
一	油屋下女おその	岩井	梅藏
一	百姓寺島の弥五兵衛	小川	十太郎
一	夜鷹おいろ	沢村	紀次
一	芸者京村屋お糸	中山	龜三郎
一	条本の二階廻しおちか	岩井	龜次郎
一	京村屋廻し源七	嵐	新平
一	鈴木弥忠太	桐山	紋次
一	船宿市川屋の三	市川	団兵衛
一	油屋多三郎	三樹	大太郎
一	中間権助	市川	成藏

一	刀屋勘吉	沢村	川藏
一	岩戸香松本屋左四郎	松本	幸四郎
一	丁稚卯の松	市川	平次郎
一	久松姉奥女中竹川	岩井	半四郎
一	竹川召仕お勝	岩井	芳之助
一	竹川下部三平	坂東	国藏
一	松本錦車	松本	米三郎
一	藤間岩太郎	岩井	喜代太郎
一	油屋手代善六	沢村	四郎五郎
一	油屋丁稚久太郎	桐島	儀右衛門
一	所化残月	坂東	音平
一	油屋子飼久松	岩井	半四郎
一	福本屋福助	市川	新藏
一	座頭	坂東	桃太郎
一	同	市川	団七
一	俄道心団作坊主	市川	団作
一	百姓庵崎の久作	市川	団十郎
一	巴屋新八	松本	虎藏
一	油屋叔父太郎七	市川	門三郎
一	油屋下男九介	坂東	善次
一	たばこ切り鬼門喜兵衛	松本	幸四郎
一	喜兵衛女房土手のお六	岩井	半四郎
一	非人ばんぼりの市	尾上	仙藏
一	髪結中の郷の龜	坂東	鶴十郎

本舞台三間の間、正面上の方へ寄せ神木の松の大樹、黒塗りの胸寄せに賽銭箱を懸け、白蛇の絵馬大分上げて有り、後には奉納の幌り沢山に建て、よき処に故人桜田の浄留理塚、竹の矢来、山吹の盛り、後に

ふりよき桜盛りの体、下モ手に葎簀張の茶屋、森田座といふ提灯を懸け、おくら前垂茶屋女にて、茶をはくじ居る。松の根方に歯磨き売り八郎左衛門、歯磨きの箱を置き、居合抜の奴にて大太刀を差し、歯磨を売り居る。長床几に若い衆の仕出し、表で口々の仕出し見物して居る。都而柳島妙見堂の景色。この道具一体好み有り。題目太鼓打鳴ら、罌口の音、御経の声にて幕明く。

八郎サ、おこのみとござれば、一手抜てお目に懸ます。コレ、丁どこの位なお差料、則男のたましい。二本差は帯刀、木は檜の木、花は桜、人は武士。もし狼藉者が切りつけてまいると、真向微塵に切りこんで参る。これが則男の重ね切り、うへは切つても下はきらぬ。そのはつじや、下は女房。歯磨きをかわけやつはなでざり、なか／＼さやうでござい。

トこれより居合抜のせりふになる。ト三味線入の謎の鳴物にかわり、向ふより若い衆の仕出し二人、百度参りして出て来る。その跡より半四郎お染の拵へ、おその下女にてお百度の帯を持ち出て来る。跡より寺島の弥五兵衛百性の拵へ、おいろ夜鷹の島屋についた拵へにて、杖をつき長房の珠数(数珠)を持出て来る。舞台の松の影より、お糸深川女郎の拵へ。おちか二階廻し、源七廻し男、鈴木弥忠太お国侍の拵へ。市川屋の三船頭、いづれもさしを持つて百度参りの体にて出て来り、よき処にて行合ひ、お糸、お染えしやくして別れ、お染らは上り塚の影へは入る。向ふより油屋多三郎息子の形にて、帯を持出て来り、花道にてお糸に行合、両方ともちよつと思入有つて、お糸懷の文を見せる。源七、おちか心遣ひ。弥忠太見つけ、つか／＼とこの中へは入り邪魔するゆへ、両方とも本意なく別れ、行違ふてお糸のむれは揚幕へは入る。多三郎は塚のかげへふりかへり／＼は入る。向ふより権助中間、刀屋の勘吉、幸四郎はつち羽折一本差左四郎の拵へ、卯の松調市にてかいきの包を持、出て来る。舞台塚の後より、二タ役半四郎御殿女中(竹川)、竹川召仕お勝お末、竹川下部三平中間にて、これもさしを持つ百度参りの体。揚幕より松本錦車、藤間岩太郎役者のよそ行き、妙見

仕出

参りの拵へ、中働きの若い衆二人リ付て、これも百度参りにて出て来り、塚の陰へは入る。御殿女中の竹川の群は揚幕へは入る。揚幕より善六手代の拵へ、ぱつち一本さし、久太郎調市にて、風呂敷包をせをひ、半紙に包し再びの地版を喰ひながら出て来る。舞台より残月、網代笠、麻衣、法花の袈裟、所化の拵にて出て来り、花道にて久太郎に行合ふ拍子に、久太郎こめしを落す。久太郎腹たて、空のうへよりあたまをくらわす。とたんに等落る。ト妙見堂の一法師大頭の拵へ。久太郎桐りする。残月むしやぶり付く。善六引わけてちよつと留る。残月小言いひながら笠を持揚幕へは入る。久太郎腹をつぶし強飯を拾ふて喰ふを、善六しかりながら塚の陰へは入る。揚幕より三役久松の半四郎これも帯を持つて百度参りしながら出る。跡より福本屋補助の芸者、座頭二人杖をつき、下駄がけにて百度参りの体、俄道心団作坊主、長房の珠数をかけ、何なりとやつしの形にて、題目をと／＼出る。久松の半四郎舞台へは入ると、向ふよりお糸、弥忠太、おちか、源七、三の群出て来る。舞台より弥五兵衛、おいろ出て来る。跡よりお染の半四郎、おその出て来り、行違ふて弥忠太のむれは舞台へは入る。半四郎のお染は揚幕へは入る。と舞台より多三郎、勘吉、権助、左四郎、卯の松、百度参りして出て来り、揚幕へは入る。揚幕より御殿の半四郎、お勝、三平、この間に仕出しをまぜて出て来り、舞台へは入る。と舞台より錦車、岩太郎、供の男、補助出て来り、揚幕へは入るうち、半四郎西の後よりとある事、もつとも一チ度なり。錦車、岩太郎のむれ揚幕へは入る。ト揚幕よりお染の半四郎、おその、跡に仕出し付て出て来り、舞台塚のかげへ行と、楽屋より吹かへの久松出て来り、お染の半四郎に行合ふ事。おその、久松に「今おまへの姉御様がお出なされた」といふ事を呟きて、直ぐにつれ立て、お染の半四郎も付き、久松を跡へ戻して奥へは入る。この間に仕出しときれぬよふに出て、右左へわかれては入る。弥五兵衛出て、下の床几にこしを懸る。奥より御殿女中の半四郎、お勝、三平出て、上の床几に腰をかける。この時八郎左衛門が居合ぬき納る。

八郎 これから亀井戸へいつて、天神様でぬきませふ。
仕出 また見に行きませふ。

ト題目太鼓になり、わや／＼いふて下座へは入る。この鳴物にて、向ふより百姓庵崎の久作、田舎者の拵にて、やつしのうへへ半天を着て、股引、草鞋、朝顔形りの葉壳簪に、田芹、たんぼ、藁づとにした嫁菜を入れ、ぶら／＼出て来り、下モの方へ荷をおろす。おくら茶を汲来り、

くら ハイあなた、お茶あがりませ。

ト竹川へ出す。

弥五 これ／＼、ここへも下さいよ。

くら ハイ／＼、ただ今あげます。

久作 モシ姉さん、わしにもいつぱいふるまいなさい。

くら アイ、今蕤花が出来るわいな。

ト竹川は煙草のみ居る。弥五兵衛、久作を見て、

弥五 ヤ貴様は、菴崎の久作じやアない（か）。

久作 ア、おまへは、寺嶋の弥五兵衛どのかへ。妙見参りにござつたのかへ。

弥五 さればさ、わしらがこのよふに妙見様へお百度を上（げ）るは、こなたの弟トの久松からおこつた事よ。

ト竹川これを聞、扇をかざし聞ある思入。

久作 モシ弥五兵衛どの、久松がどうしましたへ。

弥五 コレサ久作どの、いつぞや貴様の内に居た若衆どの、ありやアお手まへの江戸から貰つた弟御じやアござらぬか。

久作 なるほど、死（な）れたお袋がわしが弟トに貰ふた久松、今では江戸で調市奉公。

弥五 サアその調市どのに、アノ与四郎が娘のお光がうつぼれて居申は。捨て置と命害に及びまするゆへ、そこでアノ若衆どのに、死（な）れたお袋がお光を妻せよふと、約束をしもふして、そう／＼お袋はこねられる、若衆どのには江戸へ奉公。聞（け）ばその先★の主の娘と訳が有つて、

その内の聳にがななるといつて、それをお光が聞出して、この頃のぶら／＼病ひ。村内のわしらも見るも気の毒と、そこで今日は妙見様へお百度に参りました。

久作 そりやア気の毒な事でござります。しかし江戸へ年季にやつた久松、年があげざアその相談はどうも出来ませう。

弥五 ハテ、そりやア、こまつた事だの。まあ何にしろ旦那のほうで暇が出るなら、そのつもりにさつしやい。とかく向ふの娘と若衆どのが、

訳が有るといつて気をもむげなよ。

久作 アイ／＼さやうなら、まア暇ねがいをいひこんで見ませふよ。

弥五 そうさつしやるがよい。時にわしはここでわかれませふ。久作どの、ちつと遊びに来さつしやい。

久作 アイ、よふさり咄しに行ませふ。しづかにござりませ。○

ト題目太鼓になり、弥五兵衛くわへ煙管にて向ふへは入る。久作跡を見送り、思入有り。

在所娘の一ト筋に、思ひ詰たるアノお光。一寸のがれとお袋が、すへは夫婦といひなだめ、かわいやだまして置ものゝ、武家の御子息御代とりを、百姓づれの娘とどうして。

トこのせりふの内、竹川思入有つて、

竹川 それに居やるは久作じやないか。

久作 ヤ、あなたは竹川様。これはまアヨウお参りなされました。

お勝 サア／＼、おそばへござんせいな。

三平 久作どの、お久しうござります。

ト挨拶有つて、久作、竹川が方へ行き、

久作 コレ姉さん、あなたへお茶を掬へてあけて下さりませ。

くら アイ／＼、さやう致しませふ。

竹川 二人りの者は、竹川が久作へ用事も有れば、その内、勝は貫主に逢ふて願ふたお札を。

お勝 かしこまりました。ゆるりと御用を。サ三平どの。

三平 ハイ、どりやいて参りませふか。

ト合方になり、おくらは茶屋の内、お勝、三平は下座へは入る。竹川
思入有つて、

竹川 コレ久作、そなたはわしが親達に勤た乳母が実の件。委細はくわ
しうしりやるとふり、父さんのお預り牛王吉光の一腰、紛失ゆへに情
ない。

トうれいのこなし。

久作 千葉の御家中多ふき中、筋目と申、一とは下らぬお家から、誰有ふ
石津久之進様と申ては、譜代旧功の親旦那も、お預りの牛王吉光紛失
致した落度ゆへ、御切腹なされてよりお家もたたず、あなた様は奥
勤、御次男の久松様、乳母が件の私が引とり申て、勿体ない弟なりと
請判して、瓦町の油屋にお勤なさるも、紛失の牛王吉光詮義の為、な
されぬ業の御奉公。親旦那がおつしやるには、「そちや久松と乳兄弟、
申さば兄じや」と御意なされ、久之進様の一字をたまわり久作と、勿
体ない旦那のお差図。その御恩を存るゆへ久松様を引とつて、近所
の者へは弟に貰ふた者じやといひふらし、すましては置もの、水際
のたつ若旦那、娘子供が目をつけて、袖褌ぐにこまりはて、一寸のが
れの許婚。それが今では私もめいわく致しておりますて。

竹川 その在所者の光とやら、遠ふに噂も聞きました。ただ案(じ)るは久
松が、勤て居やる油屋に、一人娘の有るよふす。今もここに在所者
誰憚らぬ弟が噂。殊にお染といふ娘、江戸町中の評判と聞程姉が持病
のさわり。

久作 御尤でござります。世間統評判の小嬢娘の有る内へ、同じ小嬢
な若旦那、差置まするも、正真の井戸のはたの茶わんとやら、あぶな
いものと存れど、根がお刀を尋るあなた、殊には内も質見世の手づるに
なるふと存じ付き、置ます内にさま／＼な、人の口には戸のたてられ
ぬと譬へのとふり、若い時と申ものは、さま／＼な評判も請まする物
でござりまするて。

竹川 それがわけなき事ならば、案(じ)る胸もやすれど、モシその娘と
わけ有つて、色に迷ふて、大切な刀の詮議も延々に打すて置ば、父御
へ不幸。それが苦勞になりますわい。

久作 これはしたり、さやうにばかり思し召ては、方図がないと中者、
御発明な久松様、よもやうか／＼さやうな事も。

竹川 わしもさやうに思ふから、けふお百度を上るのも、かつは弟トが
身のさいなん、または刀のつゝがなふ手に入る為の大願も、さつきに
たしか参詣のこみ合ふ中に弟トの久松、十六七なふり袖の、供して居
やるを見かけしが、そんならあれが油屋の。

久作 さやうな事もござりませふ。久松様がこの辺へ来てござるなら、
私はお尋(む)申てお目に懸り、ごせんぎなさるゝお刀の。

竹川 よふすを聞て、手懸りの有らばさつそくしらするよふ、そなたは
逢ふて姉がことづて。

久作 畏りました。シテモウあなたはお屋敷へ。

竹川 イヤ、外に用事も有れば、アノ巴屋にて何かの支度。

久作 お目に懸らば、私もお尋申でござりませふ。

ト思入。鰐口の音になり、下座よりお勝、三平出て来り、

お勝 もはやおたち遊されまするか。この間お咄し有りし御家中鈴木弥
忠太様、遊里の女中をお連れなされ、慥にこへ。

三平 遊山がてらの物参り。御用も有らば下郎めが。

竹川 アコレ、殊あらだつてはかへつていかゞ。何かの事は巴屋にて、
そなた衆二人へ言聞かそふ。久作は弟が事をかならず共に。

久作 畏りました。さやうなら竹川様。

竹川 久作。

久作 おしづかにお出なされませ。○

ト唄になり、竹川、お勝、三平向ふへは入る。久作のこつて、

エ、そんなら、アノ久松様がお娘この供をして、けふアノこへ。

ト思入。御節になり、下座よりお糸、弥忠太、おちか、源七、三、出

て来る。茶屋の内よりおくら出て、

くら これは旦那様、ヨウお参りなされました。どなたもお茶あげませふかへ。

弥忠 イヤ、ただ今迄寺の座敷で精進酒、ほつと致した。ただ今から巴屋へ参り、魚物でいつこん下さりやう。それに致してもコレお糸なぜにおぬしは身と手をひかれては歩かぬぞいの。

お糸 それじやといふて、昼中まアどうしてそのよふな事がならふぞいな。

弥忠 ならいでわいの。これお糸、我身は身共が身受いたせば、今日中にも手附金五十両アノ者へ渡せば、勤をひかせて置て置は。すりや手を引たといふて、さつとの有ふはづもないぞよ。

源七 モシ、旦那、そりやおまへ様、通りの者のよふにもござりませぬ。子供衆の手を引てあるくは、そりやアずつと昔しの事でござりまする。

弥忠 エ、何か。むかしは女の手を引たが、今ははやらぬか。

源七 さやうでござります。わけて御新造にもなさるゝアノお子、お手をお引なさるゝは当世ではござりませぬ。

弥忠 なる程、しからば引まい。

三 そりやアイひ思しめしでござりやす。のふ、おちかどん。

ちか さやうサ、当世はいやみのないのが通りの者と申ます。子供衆にいちやつくを、通りの者と申まするわいの。

弥忠 さやうなら身共、只今迄通りの者で有つたナ。しかしこれから野道を摘草としやれよふかへ。

お糸 アイ、わたしや御願が有るゆへ、吾嬢様へお参り申て来る程に、おちかどん、おまへ一所に來ておくれ。

ちか そうしやんせう。ちよつと二人づつてお参り申て来やんせう。

お糸さん、サアお出。

弥忠 吾嬢の森へ参るなら、身共も手を引ずに参らふかへ。

お糸 イエ、殿たちをつれずに、女子ばかりでお参り申が、わたし願でござんすわいな。

弥忠 ハテそういわづとも、摘草はよいなくさみで有ふぞよ。

三 モシ、旦那、摘草よりはコレここに嫁菜や、たんぼがおります。こいつをぐつと惣仕舞はどうでござりませふ。

源七 なる程、三こうがいふ通り、こいつを菅荷買つてみやげになされませ。コレ、アノ人、菅荷みな買ふが、幾らだ。

久作 イエモウ、みなうつてしまひやした。ここに嫁菜の苞がたつた一つしかござりやせぬ。

ト苞をとつて出す。源七とつて、

源七 ア、たつたこればかりか。コレばかりはいらねへが、せつかく買ふといった物を、買すにも置れまい。これでいくらだ。

久作 何サ、よひ程よこしなさい。

源七 エ、正直な男だ。どれ錢の五十もやろうか。○

ト腰さげを見て、

なむさん、今門前の物貰ひにみなやつてしまつた。今とりによこす。

ここへ置て下さいよ。

ト荷の内へまた入れ、

久作 ハテ、持つてござつてもようござりますわな。ここへ荷を置て行ますから、いつでも持つてござりませ。わたしやア若旦那を尋ねて、どのみち逢ふて、○ 姉さん、荷をたのみます。どれ尋ねて来よふか。

ト題目太鼓になり、荷を置て下座へは入る。茶屋の内より多三郎出懸り、伺ひ居る。これをお糸見付け、

お糸 ヤア、おまへそこにかいな。

ト行ふとする。多三郎ちやつと隠れる。弥忠太惚りして、

弥忠 これ、お糸、身はさいせんからここに居るわいの。

お糸 エ、おまへではないわいなア。

弥忠 身共でなふてだれが参つた。

お糸 サアそれはナ。

源七 さやうさ、旦那でなふて、ヤアおまへとは、お糸さんたしなみなさい。

弥忠 何を見付て、おまへとはいふたのじや。

お糸 サアそれわナ。

トもちくする。

ちか ア、モシ、今お糸さんが、おまへはといひなさつたはナ。

弥忠 おまへといふたのは。

ちか アリヤへびじやわいな。

弥忠 ヤア、○

ト驚き、

へびがどこに居るく。

ちか アレく、アノ松のうへから大きな白蛇さまが、それくそこへ。

源七 ア、そいつはごめんだく。

ト弥忠太も同じよふに、みなく立さわぐ。題目太鼓になり、向ふより巴屋新八ふけたる拵へ、巴屋のていしゆにて下駄がけ、すたくと出て来る。

くら ヤ、巴屋の新八さん、こりやおむかいかへ。

新八 これはく弥忠太様、あなた方も何をおさわざなされます。

弥忠 コレく、そこらへ大きな白ひへびが出たわへく。

新八 エ、きみのわるい。そりやとんだ事だ。しかし白蛇を妙見様でごらうじるとは、有難ひ事でござりまするは。それは誠に福の神。モシく旦那、お迎ひに参りました。私の所へは只今木挽丁から役者衆が見へまして、おやしきのお客は有り、大とりこみでござります。サア旦那、お早ふ御出なされませ。お供致しませふく。

源七 そいつはおもしろいわへ。モシ旦那、このむれでぐつと押かけませふ。

三 さて、これからが大酒でござりまするぞへ。

弥忠 なる程、まいらうく。サアくお糸ばうも身共と一つ所に。

ト手をとる。

お糸 エ、またかいなア。屋中に手をとらんすと、わたしや行ぬぞへ。

弥忠 これはへいこう。しからばお手を引ませぬは。

お糸 わたしや跡から。マアお先ヶへ。ちつと御願が有るゆへに。

弥忠 これはしたり、御願は内でもかけられるわいの。

源七 ア、おつしやるから、まアくおまへは巴屋、私は講頭に逢ふて

咄しもござりますれば、旦那と一所にお出なさいまし。

弥忠 これく、そちも早ふ来やれよ。

源七 ハイく、おしつけ参ります。

くら わたしも参つてお手伝ひ申ませふ。

新八 大とりこみだ。すけて下さい。

ちか サアお出なされませいな。

ト佃節になり、跡へ心をこすお糸を、弥忠太むりにせり立、この人数のこらず向ふへは入る。多三郎茶屋かけより出懸り、お糸が文を懐より見る事有つて、

多三 この文のよふすでは、お糸を身受するといふ侍客はアノ弥忠太、手付の金も五十両、急に渡すとしらせの文言、わしも手付を拵へるその引当と、質に来て居る吉光の刀の折紙。

ト懐より出す。この時下座はたくして、丁稚久太郎、卯の松喧嘩しながら出て来り、追欠あるき、

卯の いやだく。こわめしを帰しやアがれく。

久太 なにかへすものか。あらばもつとよこしやアがれく。

卯の ふとい調市だ。かへしやアがれ。

トつかみ懸る。多三郎中へは入り、

多三 これはしたり、わりや久太郎じやないか。

久太 アイ、若旦那かへ。

卯の このがきめ、こわめしを返しやアがれ。

ト懸るを多三郎留て、

多三 これサ、我は左四郎どのの内の子藏だの。モウよいかげんにせぬか。

卯の ヲヤ、この頃おらが内へ来てござる油屋の息子さんだね。モシ、喧嘩をした事は、親方へ沙汰なしにしておくれ。コレ久太、うぬどうするか覚へてうせろ。

久太 なにたわ事を。

ト卯の松下座へは入る。

多三 ハテよいわへ。コレ久太、わりやけふここへだれと来た。

久太 アイ、番頭ばんとうの善六さんと伊勢八いせやちのともらひに來やしたが、モシおまへはこの頃お内へ出て、どこにまごついてござります。お袋さんがたいてい案じなさる事じやアねへよ。

多三 サ、わしはこの間松本や左四郎どのゝ居候。○コレ久太、我にちつとたのみが有る。これ、○

ト折紙を出し、

この書き物は大事の品じやが、アノ善六が所へ我が持ていて、この間頼んで置た事を急にしたのむ、と急度きどわたししてくれ。コレ、いさいはこの手紙を見ればわかる。このわけじやによつて、急にたのむといふてくれ。

ト二品を渡す。

久太 アイ、この二々色をわたしして、そうさへいひばよふござりやすね。

多三 ヲ、サ、早ふわたししてくれ。コレ、わしはアノ巴屋といふ茶屋に返事を待つて居ると、善六にヨウいふてくれ。

久太 アイ、そう申ませふ。

多三 間違るな。どりやお糸に逢ふて来よふか。

ト題目だいこになり、早足に向ふへは入る。

久太 エ、アノ氣まぐれ息子が、とんだ用をいひつけた。エ、きの利

かねへ人だ。

トばやい〔て〕居る所へ、善六、源七出て来り、

善六 久太郎、久太、ヤ、○

ト見つけて、

こりや久太、わりやなにを遊んであるく。大きに尋たわへ。

久太 わつちもおまへを、大きに今から尋る所さ。

善六 たわけつらめ、なんの用で。

久太 エ、何、それにたわけがいる物だ。コレ番頭ばんとうさん、今氣まぐれの多三郎さんがここへ来ての、コレこんな物をわたしによこして、○

ト折紙と文を出し、

これを善六に渡して、この間たのんで置た事をたのむといへば合点だ、といわれました。よく覚へて居たで有ふ。サアおまへに渡すよ。

ト善六とつてよく見て、

善六 コリヤコレ、刀屋の勘吉から百兩の質に來て居る吉光の折紙。お袋が奥藏おくざうの簞笥へ仕舞ふて置かしつたを、そんならわしがすゝめたとふり、引ずり出して、○

ト思入有り、

よし、○添へたる文はこりや何じや。

源七 どれ見せなさい。○

ト文をとつて、

コリヤア、お糸さんから多三郎さんへやつた文。弥忠太様の身受の相談、押付け手付の五十両、その来ぬ内におまへのほうで五十両の工面して、早く手付を渡さんせといふてよこしたこの文で、こりや息子どのが、急にあつくなつたと見へますわへ。

善六 この折紙をわしが処へよこしたは、これを預て、外々ほかほかで五十両借てくれ。二三日中には急度受て、元トの簞笥へ入て置くと、向ふの見へぬ息子のたのみ。

源七 シテこなさんは、その折紙で五十両拵へて渡す氣かへ。

善六 なんのよしみにその世話を。わしが思ふはコレ。

ト叫く。源七うなづき、

源七 エ、そんならおまへが折紙を引出させ、科は息子にぬり付て、家をばい出す工面はしれたが、内のおむすは山家屋へ、左四郎どのが仲人して。

善六 それもこつちに目算が。内の子がいの久松め、あいつが娘と色事と世間にうたわせ、清兵衛どのから変がへさせるは。また親類へは、年若なアノお袋と清兵衛どの、芋田桑だといひふらさば、せひとも破談にならねばならぬ(は)。

源七 いかさまこいつはよい工面。どの道わしはお糸をだまして、多三郎をかきのめさせ、息子をふかみへ引こむこんたん。

善六 貴様をたのむは。

源七 せうちのまくサ。

ト兩人相談する。久太郎まぢく聞て居て、

久太 ア、いひ事聞た。わるい事聞ぬ。おいらはしらぬ。ばんとうさんとどこかの人と、いひ事聞た。わるい事聞ぬ。

ト手をうつてはやす。

善六 コレくく久太く、しづかにいへく。

久太 番頭さん、わつちはみんな聞たよく。

善六 コレく、だれにもいふな。そのかわり我にはいひ事をおしへてやるは。

久太 いひ事とはどんな事だへ。

善六 これく外の事でもない。我にがうぎにほれた女が有るは。

久太 そりやあだれだよく。

善六 サア、その手まへにほれた女は、○

ト思入して、

ヲ、それく、アノ内の年若なお袋様が。

久太 エ、アノお袋様かへ。そいつは嬉しいが、おまへうそで有ふ。

善六 何うそをいふ物かヤイ。

源七 イヤア、アノうつくしいお袋様がこの久太に気が有るとは、エ、あやかり物め。

久太 それでもどうかはづかしい物、モシほんの事かへ。

善六 ほんでなふては。コレ久太、アノお袋様がおつしやるには、どうぞアノ久太と夫婦になり、わしは今までのよふに髪もはやすが、しよせん近処では夫婦になられぬ。あれが在所の葛西の柴又、二人リ暮して見たいとおつしやる。これ、手まへは先へにけていつて隠れて居る。跡よりちきにお袋様もにけてござるが、この相談はどうで有ふナ。久太 そりやあわつちが先へにけて、跡からあなたがござるなら、先へ行て待つていやせうが、ほんの事かへ。

善六 何うそをいふ物だ。にげる気ならば、コレく、○

ト紙入より金を沓分出し、

式朱をふたつやる程に、これを小遣にして在所へいつてまつている。かならず江戸へ出て来るな。

ト渡す。

久太 さうさへ出来りやあ、何江戸へ出る物か。この沓分で世帯持ふか。向ふの橋本にふぐ汁が有つたが、あれを思入喰ふか。世帯持ふか、ふぐをくわふか。ふぐか世帯か、世帯かふぐか。○

ト思入して、

ア、ふぐがいひそだ。この沓分でおも入れ喰ふ。

善六 これく久太、わりやア今ともらいの強飯をしたくつたぞよ。

久太 アイ食つてもいひわな。ふぐと餅とはさしやいたが、ふぐとこわめし氣遣ひは有るまい。

善六 なる程わりや発明だ。コレ欠落したふたたび油屋へ帰るなよ。

久太 そこは久太だ、帰る事じやあござりやせぬ。これから沓分だ。思入喰い。わしが在所は葛西の柴又、思入食つて建立しよふ。

源七 そりや何の建立を。